



### ◇水の乏しい碧海台地

この地方は矢作川沿岸の洪積台地が主体であり、安城が原と呼ばれる荒涼たる草野が広がるやせ地帯であった。わずかに台地の間を流れる小河川沿いに、古くから小規模な水田が開かれ集落が発生してきたにすぎなかった。やがて湧水を利用したり、低地にため池を設けて水田を拡げていった。これらのため池はめぼしいだけでも84か所、その面積は488haあり、耕地の半分以上がこれらのため池に依存していた。

また、井戸や低い川から水をくみ上げるために「はねつるべ」や「ふみぐるま」を用いて水を引いており、常に水不足に悩まされ水争いが絶えなかった。



「はねつるべ」

### ◇都築弥厚の用水計画

水不足による農民の苦境を救うため、矢作川の水を碧海台地に導いて、大規模な新田開発を最初に計画したのは、和泉村（現安城市和泉町）の都築弥厚であった。

地主で酒造を営み、代官をつとめていた弥厚は、今からおよそ200年以上前、農民の反対にあいながらも算学の大家であった高棚村の石川喜平の協力を得て測量を始めた。水害などをまねくであろうと誤解した農民の反対にあい、日中の測量は中止し夜間ひそかに測量を続け、着手以来5年の歳月を経て文政9年（1826）に測量を完成して、翌10年幕府に出願したが、開水にともなう水利慣行の変化や入会地の減少などをおそれた農民や各領主の反対は強かった。

その後、天保4年（1833）「三河国碧海郡新開計画」は一部許可されたが同年9月、2万5千両余の借財を残して69歳で亡くなり、この計画は挫折した。



# 安城が原の苦難

こうりょう  
——荒涼たる草野



「ふみぐるま」

### ◇位置及び地勢

愛知県の三大河川は、西に木曾川、東に豊川そして中央に矢作川が流れている。明治用水は矢作川を水源として豊田市水源町で取水し、安城市を中心に岡崎、豊田、知立、刈谷、高浜、碧南、西尾の8市にまたがる矢作川右岸の農地をかんがいしている。

東南は矢作川、北は逢妻川、西は衣浦湾に臨む一帯で南北22km、東西13kmである。地勢は、北東部より南西部に向かい、約1/800～1/1,500で傾斜し、標高は豊田市の高地部で26m、西尾、高浜、刈谷市の低地部で1m～9mで概ね平坦である。



### ◇岡本兵松と伊豫田与八郎

弥厚が没して39年、岡本兵松は弥厚の意志を再興しようと用水計画を出願した。またこのころ、伊豫田与八郎は矢作川右岸低地の排水を利用して、碧海台地をかんがいしようとする計画をたて出願していた。

明治6年、愛知県に届けられ両計画は一本化することでようやく許可がおりた。以後、二人は協力して地元農民の説得や工費の調達に奔走し、開削工事が着手されたのは、明治12年（1879）、工費16万3千円（現価約23億円）であった。田中勘七郎・加藤太兵衛・本多寛三郎・黒宮許三郎・中根祐・木藤八三郎らの協力者から出資を得、不足分は愛知県が立て替えた。こうして、岡本兵松・伊豫田与八郎らの努力が実り、都築弥厚の夢が実現することとなった。

工事は、昼夜兼行で進められるも、それでもまだ反対する村々があった。岡本は「工事ができあがれば、恨む村は三か村、喜ぶ村は数十か村、なにほどのこともない。」と、強く言い放ったとのことである。

